井筒屋町造商店が立ち上がるまで(2)

2004年7月
秋田家蔵活用プロジェクトの設置

2004年7月の会議からは、ワーキンググループ全体をテーマ別に3つプロジェクトに分けました。

ワーキンググループのプロジェクト
- 秋田家蔵活用プロジェクト
- チャレンジショップ プロジェクト
- 情報ナビ･イベント プロジェクト

そのうちの一つが、秋田家の蔵活用プロジェクトであり、建物改修や運営方針など家蔵活用の具体化に向けての検討が役割です。
しかし、秋田家の蔵活用については、検討課題の広さなどから、ワーキンググループの会合日以外にも会合をもちつつ、他のプロジェクトのメンバーも関わりながらの取り組みが進められました。

ワーキンググループの主な検討内容

ワーキンググループで出た意見を会議の記録などから一部抜粋します。

■秋田家建物の役割
- 地域文化(生活･産業)の発信
- 地産地消のステーション
- 中心市街地の情報館

■利用方法
- 人が集まる場
  ～ギャラリー、お休みどころ
- 新しく所沢に移り住んだ方と所沢に従来から住んでいる方の交流の場

■運営
- 運営のための母体を新設
- 数年で自立 5年の暫定利用をし、その後も運営組織は存続
- ボランティアによる運営
- 補助金なしでも運営できるようにしたい

■内装改修の進め方
- その後も関わってもらえるよう、多くの市民の参加を得て改修する。

■その他意見
- 外に対してオープンな雰囲気
- まちの思い出、記憶、暮らしぶりなどをアーカイブスとして蓄積
- 公民館や地元集会所と連携
- 「お母さん役」を1人を常駐させる
- 喫茶店にし、毎週異なる地元のお菓子を置く(地元への親しみ)。
- 講習会(古布での草履、羽子板、所沢絣、焼き団子、竹細工作りなど)を開く。
- 子どもの遊び道具作りをする。

メーリングリストの開設

1ヶ月単位のメンバーがやや変動する会議で効果的な話し合いが難しかったことから、10月にメーリングリストを設けました。開店までで379通のメールのやり取りがありました。

秋田家蔵の改装
ボランティアによる内装の解体

2004年7月～10月
3回に及んだ内装の解体

ワーキンググループに参加していたボランティア有志を中心に地元の辻村士郎さん、小澤浩史さん等も参加してくれ、建物の内装を3回にわたり解体しました。

改装前の建物は、中央に壁があり、2つの店舗･事務所に分かれていて、天井･壁･床などは、新しい建材で覆われていたので、それらをはがし、昔の姿にする必要がありました。

1回目 7月31日(土)
間仕切りと天井の解体
2回目 9月4日(土)
向かって奥右側にあった部屋を解体してぶち抜き、現在のような広い空間に
3回目 10月16日(土)
床はがしとトイレ工事

ほこりをかぶりながらも楽しい作業

『所沢たてもの帖』の編集に携われた大平茂男さんや工務店の大石健一さんに解体の方法を教わりながら、主に、大きめのバールやかなづちを使って、壁や床のベニヤ板等をはがしたり、釘を抜いたりしました。
頭には帽子をかぶったりタオルをまいたりして、手には軍手をはめ、ほこりがたつときには、マスクもしました。
汗だくで真っ黒い顔になりながらも、なんとも言えない盛り上がりがありました。

カレーライスや団らんのひと時

秋田道子さんが作ってくださったカレーライスなどがおいしかったことや、作業を終えてからの団らんが楽しかったことが良い思い出となっています。

解体作業は面白かった。天井を壊したら昔の漆塗りの立派な天井が現れた。いや～これは宝物だ～、とみんな思った。そして、建物の大きな柱や梁に食込んだ釘や画鋲をニッパーやペンチでとりのぞき、土間に打たれたコンクリの跡をながめ、刳りこまれた柱の改造痕、わずかに傾いた梁の隙間を見ながら、この柱や梁のたどってきた歴史を想像した(成沢富雄さん談)。

まちづくり施設としての役割の芽生え

作業をしていると、重松流祭囃子について知りたいと人が立ち寄ったりして町案内の役割も担い始めていました。また、解体作業の3回目には、歩行者や自転車の交通量調査も同時に実施して、まちのことを考える機会を設けたりもしました。

昔の姿に戻すための改装

内装の解体作業はボランティアが携わりましたが、その後、昔の姿に復元するための改装はプロにおまかせして、年末休みもない突貫工事を進め、今日の井筒屋町造商店の姿になりました。